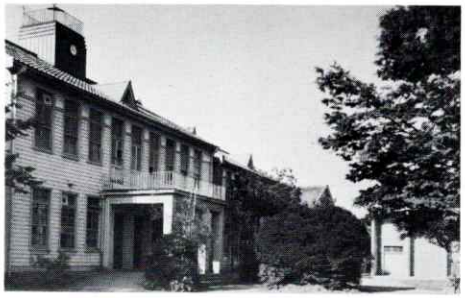
校舎炎上



焼失前の校舎

一時間半の悪夢

昭和五十二年四月十五日の深夜、本校に火災が発生した。輝かしい歴史を刻んできた校舎も木造のため火には弱く、延々一時間半にわたって燃え続けた。その結果ほとんどの教室が灰となり、残ったのは体育館、講堂、図書館、それに南側校舎の職員室の部分だけであった。

出火時刻は午後十一時四十分ごろと推定される。北側校舎一階の階段教室付近から出た火は一気に火勢を増し、渡り廊下を伝わって南側校舎に延焼した。盛岡消防署は十一時五十分に第三出動を発令し、同署と市消防団各分団から三十二台の消防車がきて懸命の消火作業に当った。そして十六日の午前一時十五分、さしもの猛火も鎮まった。木造二階建ての校舎面積四千八百十一平方メートル中、延べ三千四百平方メートルが失なわれた。

火災の発生に際し、雨もようの深夜にもかかわらず、市内の教職員・在校生・卒業生が続々と学校にかけつけ、消防団と一致協力して消火や重要書類の持ち出しを行なった。校長室の初代理事長と歴代学校長の写真や、野球部甲子園出場の思い出につながる「花と少女」の絵も、こうして難をのがれることができた。

近くの民家に燃え広がらなかった点、また負傷者を出さなかったことは、不幸中のさいわいであった。なお、出火原因については盛岡署と県警察本部が調査し、たばこ火の不始末、教材用薬品の自然発火の説などが出たが、はっきりと断定するまでには至らなかった。

授業再開まで

鎮火後七時間程度しか経っていない四月十六日の朝、登校してきた生徒たちは、母校の無惨な姿に息をのんだ。しかし全校が講堂に集まり、遠藤貫中校長から「こういう非常のときこそ、なお一層愛校の精神を持て。むやみに動揺するな」とさとされ、気を取り直して焼け跡の整理にとりかかった。この日の作業は、最上級の高校三年生が中心となって受け持った。

翌十七日は日曜日であったが、二年生が登校して校舎周辺の整理に当った。また職員側では校務運営委員会を開き、十八日以降の段取を協議した。

教職員・在校生をはじめ、関係者全員の願いは、一日も早く授業を再開することであった。そのため、生徒の焼け跡整理作業には真剣味がこもっていたし、十八日の職員会議では教室の割り振りを決めるまでにこぎつけている。

こうして、四月十九日の火曜日から、授業が再開された。日曜を中にはさんで、わずか二日しか休校していない。確かに火災は大きな痛手であったが、この非常時に発揮された石桜精神は、本校の明るい未来を保証するものであった。中学校は寄宿舎の講堂で、高一・高二はそれぞれ焼け残った講堂と雨天体操場で、高三は音楽室と柔道場と図書館でというまことに不自由な授業ながら、師弟の心の絆は堅く結び合わされていた。

好意のかずかず

校舎のほとんどを焼失するという悲運に見舞われた本校に対し、各方面から、いろいろな声援が寄せられた。

県教委からは、日中教室の空いている定時・通信制校、杜陵高を使ってはどうかとの申し入れがあった。また、工藤巌盛岡市長は、「市内の小・

中学校で空いている教室を使ってもらってもいい」と表明した。さらに高松医院からも、教室提供の申し出を受けた。こういった好意も、分散を避けたいとする学校側の考え方から、謝して辞退せざるを得なかった。

県内の多数の中学・高等学校生徒会が、本校に見舞金を送ってきた。校内カンパした総額を、端数のついたままとどけてくれた学校も多かった。この暖かい友情を末長く記念するため、本校生徒会は見舞金で応援団の太鼓を購入した。

授業の正常化

わずか二日の休校で授業再開にこぎつけたとはいえ、その実態は不自由きわまりないものであった。とくに高一と高二は、講堂や雨天体操場を使っての、二百人を越す集団授業であり、まともな教育ができない状況のもとに置かれていた。

理事者側では、何とかこの状態を改善しようと着々と決断を下していった。火災直後に机を発注し、旬日を出ないうちに講堂の間仕切り作業にとりかかった。この工事が四月二十五日の深夜に完了し、翌日から高一は四クラスに分かれて授業を受けることになり、集団授業が解消した。続いて五月一日には雨天体操場の間仕切りを行ない、高二も四クラスの授業に移行した。

しかし、これだけでは雨天の体育や音楽などの授業ができず、正常化が実現したとはいえない。そこで本格的な校舎再建が成るまでの間、プレハブ校舎を建てて、教室数を確保することになった。これが五月三十一日に完成し、翌六月一日一時限に教室の移動を終えた。

このプレハブ校舎は二棟、十一教室で、中学三学級と高校八学級が、さっそく使用した。火災後一カ月半ぶりに、正常な授業に戻ったわけである。校内に、やっとホッとした空気が流れるようになった。あと残された問題は、本格的な校舎再建を、いつから、どういう形で始めるかということであった。

低下しなかった志気

突然の受難に、教職員と在校生の心が打ちひしがれるのではないかと心配されたけれども、これは杞憂に終ったようである。四月下旬に開かれた理事会は、現在地に鉄筋の新校舎を建設することを決めた。まに石桜同窓会やＰＴＡもひんぱんに会合を持ち、新校舎の早期実現を要望した。こういった動きが、校内の動揺を未然に防いだ。

石桜会の活動を見ても、火災の十日後には、もう応援歌練習を開始している。また五月十六日に選出された石桜会役員が、この際徹底的に生徒会のあり方を検討し、討議してみたいと申し出、国立岩手山青年の家での二泊三日の集団研修を実現させた。その他全般的に、校内の志気は低下するどころかいよいよ結束を固め昂揚していった。

新校舎建設をめぐって

校舎再建の問題は、火災が発生する前からの懸案事項であった。昭和十三年に建てられた木造二階建ての校舎は痛みがひどく、再建を望む声が強かった。ことに石桜同窓会が、母校創立五十周年の記念行事として開催した昭和五十一年十月の同窓会総会では、この問題が最大の関心事となった。

五十二年四月の火災は、校舎再建をめぐる議論を燃え上がらせた。本校関係者のみならず、新聞やテレビなどのマスコミまでが、これを取り上げるに至った。そして、世間の耳目が学校法人岩手奨学会の動向に向けられた。

こうした中で、四月下旬の理事会は、現在地に校舎を再建する旨の決断を下し、その後、具体的な検討が進められ、ついに八月下旬に開かれた理事会で、新校舎建設の具体的な計画が確定した。

それによれば、昭和五十二年九月に地鎮祭をとり行ない、ほぼ一年間の建設期間で新校舎が誕生するもようである。鉄筋コンクリート四階建て、一部三階建ての新校舎は、建坪延べ五千二百七十八平方メートルの規模を誇ることになる。

ついに悲願成就の日が目前にせまった。理事会の英断は、本校関係者全員の大きな喜びに他ならない。石桜百年の礎が、ここに確固として築かれたというべきである。歴史ある校舎の消失は痛恨事であったが、災を転じて福となした決定に、われわれの深い感謝の念を捧げたい。石桜精神は新しい殿堂を得て、新時代をきり開く大きな原動力に育って行くであろう。母校の輝かしい未来への羽音が心にひびき、建学の精神具現の夢がはてしなく拡がる。